

烏帽子会會報

2009年春号 Vol.46



新診療棟の新築工事

- 第28回烏帽子会總會のご案内 4p
- 教室・部門紹介 特集 9p
- 在外研究援助金募集 22p
- 正会員 75周年寄付情報 1~2 26~29p
- 研究奨励賞募集 裏表紙

福岡大学医学部同窓会

目 次

・副会長挨拶			
寄付の歴史をつくりましょうよ！	朔	啓二郎	3
・総会案内			
第28回烏帽子会総会のご案内			4
・教授就任挨拶			
教授就任のご挨拶	風川	清	5
教授就任挨拶	平塚	義治	6
・退任挨拶			
退任のご挨拶	田中	彰	7
退任を迎えて	白日	高歩	7
・国試激励会報告			8
・教室部門紹介			
福岡大学医学部 呼吸器内科学	藤田	昌樹	9
福岡大学医学部 腎臓・膠原病内科学	中島	衡	9
福岡大学医学部 神経内科学	馬場	康彦	10
福岡大学医学部 小児科学	井上	貴仁	11
福岡大学医学部 皮膚科学	高橋	聡	12
福岡大学医学部 脳神経外科学	大城	真也	12
福岡大学医学部 消化器外科学	篠原	徹雄	13
福岡大学医学部 形成外科学	蔡	顯真	13
福岡大学医学部 整形外科学	佐伯	和彦	14
福岡大学医学部 眼科学	尾崎	弘明	15
福岡大学医学部 耳鼻咽喉科学	宮城	司道	15
福岡大学医学部 歯科口腔外科学	梅本	丈二	16
福岡大学医学部 病理学	久野	敏	16
福岡大学病院 輸血部	黒川	みどり	17
福岡大学病院 薬剤部	緒方	憲太郎	17
福岡大学病院 総合診療部	北島	研	18
福岡大学病院 臨床研究支援センター	野田	慶太	19
福岡大学病院 臨床工学センター	田代	忠	19
福岡大学病院 卒後臨床研修センター	比嘉	和夫	17
・会員寄稿			
東京大学産学連携プロジェクト (EIR) への挑戦～挫折と再生～	三原	誠	21
・在外研究援助金募集・受給者名簿			22
・訃 報			
追 悼	廣瀬	伸一	23
・医局長・医長名簿			24
・教育職員人事			25
・お役立ち情報			26
・事務局だより			27
・編集後記			27
・研究奨励賞募集			(裏表紙)

副会長挨拶

「寄付の歴史をつくりましょうよ！」

福岡大学心臓・血管内科学講座 主任教授 朔 啓二郎 (烏帽子会副会長・1回生)



皆様、いかがお過ごしでしょうか？福岡大学医学部の入学式も無事終わり、今年は医学部卒業生の12名の子弟が入学さ

れました。85名の一般入試にたいし、2,200名の受験生の応募がありましたが、この数年、福岡大学という都市型大規模大学のブランドが、多くの受験生を引きつけるようです。大学人として、さらに一歩進んだ魅力ある大学を創るため、一層の努力を心がけています。研修必修化にともない減少していた研修医の数も、今年4月から緩やかではありますが元に戻りつつあります。全世界的な金融不況と少子化による18歳人口の減少は、大学も旧態依然たる対応では進化も発展もなさそうです。このことをいつも肝に銘じ行動することにしていきます。

同窓会執行部として、福岡大学創立75周年記念事業募金を2年前よりお願いしておりました。医学部・病院創立35周年記念事業としても募金活動を推進しています。昨年は記念事業の一つとして日野原重明聖路加国際病院理事長をおよびして、「命の大切さを考える」と題した市民公開講座を開催しました。大盛況でしたのは、新聞・広報を通して皆様ご存じのことと思います。

寄付の現状をご報告します。まず、烏帽子会高木会長、当時副病院長をしておりました私、その後、臨

床検査医学講座の教授に昇格された松永教授から、皆様に寄付のお願いを文書で送らせていただいた経緯があります。現在、平成21年4月末で約6,000万円程度のご寄付が集まりました。ありがとうございます。一昨年および昨年、評議員会、同窓会総会において、同窓会本部から支出可能な寄付金額をご呈示し、本部からの寄付を了承していただいておりますが、執行部が考えるのは総額1億円です。今回の募金受け付け期間が後1年ありますが、目標額に達しない差額を本部から寄付する予定です。

寄付はあくまで任意のもので強制ではありません。また、大学の募金委員会が行っている事業の一環ですので、寄付目的はいくつかあります。図書館棟や大濠高校、その他様々な寄付対象がありますが、皆様には現在工事中の新病院に対する寄付に印をしていただき、医学部・病院の実績となるようお願いしております。

さて、大阪の八百八橋をかけたのは大阪の富豪、富商の寄付だったそうです。天災で橋が流されると、また寄付をする。しかし橋をかけるための杭打ちにはお金がかかる。その寄付のために倒れる商家も出てき、これが「杭(クイ)倒れ」の言葉の原点になったそうです。臓器移植を提供する方をドナー、受ける側をレシピエントといいます。ドネーション(寄付)は、本来様々な深い意味を含みます。将来の福岡大学をサポートすることの意味が明確でないと寄付活動は推進しないことも承知しておりますが、初めて同窓会全体で行う事業です故、寄付の歴史を創るという大きな意味がそこにあると感じています。寄付は金額同様、寄付者の数も大学本部の評価の対象になります。多くの同窓の皆様、何卒、ご理解をよろしく願います。

[註]26～29ページの資料をご覧ください。

第28回烏帽子会総会の御案内と御誘い

2回生の後ろについて、ちょっとだけ御手伝いした「第18回烏帽子会総会」から10年たちました。第28回烏帽子会総会を我々12回生と22回生が御世話する事となりました。12回生からは平成になってからの卒業です。昭和の時代と比べ医療レベルが変化したのはもちろんの事、医療と取り巻く様々な環境も激変しました。こういう時期でもあり、南 俊秀

先生の御講演を企画しました。

同窓会総会学年幹事制も12年目です。同窓会も、創生期から徐々に成熟期に入り諸々の事業も行われています。皆さんの眼でその変化を御確認しに、何より懐かしい御顔を見に、懐かしい御顔で一人でも多くの方が、おみえいただける様、御願いたします。

「第28回烏帽子会総会を成功させる会」事務局
12回生 会長 田中 達朗
事務局 笠 健児朗

第28回烏帽子会総会 開催要領

会場	ホテル日航福岡	福岡市博多区博多駅前2-18-35
		電話 092-482-1111
日時	平成21年7月11日(土)	
総会	5F 中宴会場 志賀の間	17:30~18:15
講演会	5F 中宴会場 志賀の間	18:15~19:15
	講師：南 俊秀 先生(福岡市、南クリニック院長)	
	演題：「医療現場は、なぜ荒れるのか」	
懇親会	4F 大宴会場 都久志の間	19:15 ~ 21:15
会費	1万円	

講師プロフィール

1958年長崎県五島市生まれ。滋賀医科大学卒業。医学博士。滋賀医科大学麻酔科、大阪の吹田市民病院麻酔科等を経て1994年より福岡市南クリニック院長。2002年4月より2008年3月まで、福岡市急患センター専任責任者を兼務。ライフワークとして生存の科学を研究する。著書に「モンスターペイシェント」……崩壊する医療現場、(角川SSC新書)、「日本の人口は減らない」(マネジメント社) ホームページ <http://www.biobalance.jp/index.html> (南クリニック)

推薦の言葉

南先生と、私は1991年から2年間、滋賀医科大学での臨床麻酔と生理学教室で一緒しました。公私ともに大変お世話になった、大恩ある方です。その後、縁あって福岡の地で開業され、このたびは烏帽子会総会で講演していただくことになりました。会員皆さんにも先生のお人柄と、得意の話を、堪能していただける、と今から楽しみにしております。

文責：12回生 平田 (現福岡大学病院麻酔科)

ご出席のご返事を、次ページ綴り込みの葉書で
6月20日までにお送り下さい。

教授就任挨拶

教授就任ご挨拶

福岡大学筑紫病院 脳神経外科 風川 清 (特別会員)



風川 清 教授 略歴

- S57. 3 防衛医大医学教育部医学科卒業
- S57. 5 防衛医大病院研修医
- S59. 6 航空自衛隊熊谷基地医務官
- S59. 6 関東脳外科病院にて研修
- S61. 1 富士重工社会保険組合総合大田病院にて研修
- S61. 8 自衛隊中央病院脳神経外科
- H 2. 5 国立循環器病センター脳血管外科
- H 6. 4 福岡徳洲会病院脳外科
- H10. 4 福岡大学医学部脳神経外科助手
- H12. 4 福岡大学筑紫病院脳神経外科助手
- H13. 4 福岡大学筑紫病院脳神経外科講師
- H16.10 福岡大学筑紫病院脳神経外科助教授
- H20.10 福岡大学筑紫病院脳神経外科教授

この度、伝統ある福岡大学医学部同窓会に入会させていただくことを大変光栄に思います。どうぞよろしくお願い申し上げます。筑紫病院脳神経外科教授就任に際してご挨拶をさせていただきます。

私は兵庫県立神戸高校を卒業しました。高校時代はラグビー部に所属して3年間練習に明け暮れましたので2年浪人して防衛医大に入学しました。卒業後は防衛医大病院で2年間の総合臨床研修を受けた後に2年間航空自衛隊熊谷基地医務室で勤務しました。仕事は一般内科外来と自衛官の身体検査でした。医務室勤務の間を縫って慶応大学の関連病院で研修して麻酔科標榜医を取得しました。脳外科の研修を開始したのは卒後5年目からになります。私たちの時代は一般大学の卒業生は卒後すぐに入局し脳外科研修を始めるのが普通でしたので、私は現役入学でストレートに卒業して脳外科研修を開始した方よりは結局6年遅れで研修を開始した事になります。筑紫病院赴任までに研修した病院は群馬大学、慶応大学、東京大学、京都大学、長崎大学の各関連施設で最後に平成10年からの2年間は福岡大学病院で勤務しました。この経験を活かして様々な大学の異なる考え方や手術手技、指導方法の中から一番良いと思うものを取り入れて筑紫病院独自のスタイルを作り上げつつあります。筑紫病院での9年間は福岡大学卒業生のみならず、他大学の卒業生にも医局作りに参加してもらいました。カンファレンスや手術に参加してくださった医師の出身大学は、弘前大学、東京大学、金沢大学、岐阜大学、関西医科大学、広島大学、佐賀大学、久留米大学、熊本大学、長崎大学、鹿児島大学、福岡大学、防衛医大に及んでいます。今後も大学の垣根を取り払った活気ある教室づくりを進めてゆきたいと考えています。これから他流試合を検討している先生や転職を考えている先生で脳外科に興味をお持ちの方がいらっしゃれば、是非一度筑紫病院脳神経外科を覗いてみてください。福岡大学に所属しながらも他流試合は経験できますし6年くらいのブランクはすぐに取り戻せると思います。筑紫病院脳神経外科では脳神経外科のみならず内科的脳卒中診療や血管内治療、麻酔科の研修も受けることができます。

私たちは筑紫の地にて高度で暖かい血の通った脳外科診療を提供するよう精進を続けて参ります。今後とも変わらぬご支援・ご指導を賜りますようお願い申し上げます。

教授就任挨拶

福岡大学筑紫病院 泌尿器科 平塚 義治 (特別会員)



平塚 義治 教授 略歴

- S48. 3 長崎大学医学部医学科卒業
- S48. 6 福岡大学病院臨床研修医
(泌尿器科)
- S50. 4 福岡大学医学部助手
(泌尿器科)
- S59. 4 福岡大学病院講師
(泌尿器科)
- S61. 4 田川市立病院
(泌尿器科部長)
- S62. 4 福岡大学病院講師
(泌尿器科)
- H 2. 6 米国 UCLA 客員教授
- H 3. 6 福岡大学病院講師
(泌尿器科)
- H 3.10 福岡大学医学部助教授
(泌尿器科)
- H 8. 4 福岡大学筑紫病院助教授
・泌尿器科部長 (泌尿器科)
- H19. 4 福岡大学筑紫病院准教授
・泌尿器科部長 (泌尿器科)
- H20.10 福岡大学筑紫病院教授
・泌尿器科部長 (泌尿器科)

私は、昭和 48 年に長崎大学を卒業後、直ちに福大泌尿器科に入局、多くの同窓生の方はご存じと思いますが、当時は坂本公孝教授、有吉朝美助教授、大島一寛・藤沢保仁両先生の 4 人体勢で、その中に福大病院第一回研修医として入りました。現在大学内では福大病院の開院当時を知る数少ない一人となりましたが、医学部は昭和 47 年開設ですので、1 回生の諸君とあまり年は変わらず、仲間として一緒に創設期を頑張った記憶は鮮明に覚えていますし、そのことが現在の私を作ったと思っています。

平成 8 年より筑紫病院泌尿器科部長として赴任、現在は石井龍、平浩志、中山一郎 (4 月から坪内洋明先生) の各先生と切磋琢磨しています。幸い筑紫地区には、同門の吉田隆、池上浩規両先生が開業されていますし、徳洲会病院泌尿器科は福大から医師を派遣していますので、筑紫ウロプログラムカンファレンス、筑紫地区勉強会、市民公開講座などを一緒に開催して、自分達のレベル向上と共に、筑紫地区の皆様の泌尿器科疾患への理解を深めてもらうべく努めています。

筑紫病院泌尿器科の現状ですが、主に尿路性器癌の治療を行っています。最近 5 年間では、腎臓癌に対する根治手術 66 例 (開放手術 18 例、腹腔鏡手術 33 例、腎部分切除術 15 例)、腎盂・尿管癌に対する腎尿管全摘除術 21 例、前立腺癌に対する前立腺全摘除術 132 例、膀胱癌に対する膀胱全摘除術 43 例、尿路変向術は尿管皮膚瘻術 34 例、回腸導管 6 例、新膀胱 11 例、その他経尿道的膀胱腫瘍切除術 138 例です。特筆すべきは、尿路変向術である尿管皮膚瘻術の無カテーテル化にほぼ 100% 成功していますので高齢者の膀胱癌に対しても安心して手術が行える点です。従って現在までの、尿管皮膚瘻術や膀胱全摘除術の症例経験数は本邦でも 1-2 位を占める位置にいますし、マスコミなどでも取り上げてもらっていますので、癌の治療ではある程度の所を維持できていると考えています。

今後は、若い学徒とともに切磋琢磨して、人として医師としての使命を果しながら、その魅力を共に分かち合っていく過程で若い人が成長する手助けができればと思います努力して行きたいと考えていますので、同窓会の皆様のご指導、ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

退任挨拶

退任ご挨拶

福岡大学筑紫病院 田 中 彰 (特別会員・前筑紫病院長)



先日、私が好きな番組の一つ「朝まで生テレビ」を観た。「日本の医療崩壊」がテーマであった。医師数の絶対的不足、医師の都市化集中、救急医療のたらい回し、産科・小児科医の不足などが喧々囂々と議論され、医療従事者の国家公務員化という極論も飛び出したが、明白な答えには至らなかった。最後に司会者がまとめた。「要は、国民が“医療福祉”に何を望むか、どうすべきと考えるか、意思表示をすることだ。それを政府が汲み取り、“国家ビジョン”として提示することである」と。こ

のように政府のきびしい財政的しめつけの中で、医療を継続し、医学教育・研究と両立させるのが、大学病院の宿命であろう。至難の業である。私も志を遂げることはできなかった。しかし、その解決法は先の司会者の結論にあるのではないかと。「スタッフ一人一人が、どうありたい、どうあるべきかを考え、それをトップが明確なビジョンにまとめるべきである」と。そこには、スタッフ同士または外の人達との人間的信頼関係の構築・維持が必須であることはいまでもない。

私は、今、すべてから解放されてホッとしている。静かにfade outしたいと思っている。今後は、今までやってきた“西アフリカ、モンゴルとの国際医療連携の推進”に足を踏み込みたいと願っている。

退任を迎えて

福岡大学医学部総合医学研究センター 白日高歩 (特別会員)



私の福岡大学における勤務はおおよそ30年近い長年月に及んだ。しかし、それは一貫したものではなく、途中の一時期産業医大外科教授として3年3か月北九州で勤務したので、結局同医大に赴任するまでの前期(昭和52年12月～平成2年3月)と、福岡大学に再赴任した後の後期(平成5年6月～平成21年3月)とに分けられる。前期においては、九大在任中のある日、突然、教授から来週より福岡大学に赴任するよといった話で決まった事であったし、後期においても、よもやまた福岡大学に帰るとは思ってもいかなかった状況の急な変化によるものであった。私が自分の意思でそのようにしようと思ったわけでは決してなく、福岡大学が再びお前を必要としているからとの強い要請があったことであった。しかしその要請に従い、与えられた

場で全力を尽くさせていただいた結果、今日の無事な退任を迎えることができたと思う。前期、後期合わせて30年という長きにわたり、私を支えいろいろと協力していただいた医局員ならびに医学部・病院職員すべての方々に深く感謝している。

私が産業医科大学から福岡大学に呼び戻されたもっとも大きな理由は外科部門のidentityの確立にあったように思う。すなわち自立の意志とその実行であり、そのために自分としては可能な限りの力を尽くしたつもりであった。当然ながら、その努力は個人あるいは自分の医局が利益を得るためのものでは決してなく、あくまで福岡大学の発展のためになされた事である。非常に辛い局面にぶつかる事が多かったが、よき結果を信じて立ち向かう以外に手段はないとの覚悟を心の底に持っていた。

在任中、私が常に医局員に求めたものは、一人一人が具体的な目標を掲げてそれに邁進してもらう姿勢であった。そして、その目標はいつも自分の現在よ

りやや高い位置に設定してもらった必要があった。その目標が達成されればさらに次の目標を掲げることができるわけで、気がついてみれば予期しなかったような高い位置に自分が存在することに気がつくはずと考えたのである。その方針が正しいものであったかどうかは、しばらく時を経て振り返っていただくしかない。

一流になるためには目標を常により高きにおいてそれに向かって努力する事が大切で、自分たちのための王道は用意されていないのである。

いつの日か福岡大学医学部が国内外有数の一流大学として評価される日が来ることを固く確信している。

白衣贈呈式

白衣贈呈式報告

5年生のBSL開始を2日後に控えた平成21年3月28日(土曜日)、臨床大講堂において恒例の白衣贈呈式が行われた。この行事は、新しく5年生になる後輩に対して先輩が臨床実習のための白衣を贈り、その進級を祝うと共にいよいよ医療へ立ち向かう若い医療人としての心構えを新たにせんとするためのものである。

同窓会専務理事の竹下教授の司会により、白衣は先ず同じく専務理事の松永教授から学生代表の中川道元君へ渡された。その後全員白衣をまとい、松永教授の激励の言葉を胸に納め、中川君が謝辞を述べて式を終えた。(贈呈される白衣は長、短各1着である)



贈呈された白衣は長短各1着であり、極上質の生地に福大医学部烏帽子会エンブレム、大学名、個人名が、目立たぬように謙虚に刺繍されている。先輩達の経験により機能も改善され、使いやすく出来上がっていて好評である。それに応えて同窓会事務局で個人追加注文も受けている。こちらは有料。詳しくはインターネットホームページをご覧ください。

教室部門紹介

福岡大学医学部 呼吸器内科学

呼吸器内科医局長 藤田昌樹 (准教授)

平成19年4月設立という新しい講座です。渡辺憲太郎教授の下、藤田昌樹准教授、豊島秀夫講師を含め助教以上のスタッフが6名、病院助手、大学院生、研究生を含んでも総勢12名の小規模講座です。小人数のメリットを生かして、和気藹々と教育、臨床、研究へと取り組んでいます。疾患としては、肺



癌、間質性疾患、気管支喘息、肺気腫、肺炎、睡眠時無呼吸症候群などを取り扱っています。腫瘍、感染症、アレルギー、血管障害など多領域に及ぶ疾病範囲をカバーし、医学教育、内科診療に重要な位置を占めています。昨年度は外来のべ10,971名、入院患者数486名(肺癌222名、呼吸器感染症59名、間質性肺炎52名、気管支喘息・COPD21名、睡眠時無呼吸症候群125名、他9名)の診療実績でした。研究に関しても原著英文論文が出せる環境になりました。設立2年経過し、講座としての体をなしてきたところです。福岡近郊のみならず、全国的にみても呼吸器内科は専門医が不足しています。幸いにも、平成21年度には、新たに2名の呼吸器内科専門医を目指す人材が当科に参加していただきました。今後とも実地臨床に役立つ呼吸器内科専門医をさらに育てていければと考えています。

福岡大学医学部 腎臓・膠原病内科学

腎臓・膠原病内科医局長 中島 衡 (准教授)

腎臓・膠原病内科(腎臓)の主要な診療内容は腎炎・ネフローゼ症候群や腎不全などの腎疾患の診断と治療です。斉藤喬雄(教授)、小河原悟(講師)、村田敏晃(講師)、笹富佳江(講師)、安部泰弘(助教)の5人のスタッフが中心となって診療しています。腎生検の組織診断は光学顕微鏡、蛍光抗体法、電子顕微鏡標本により病院病理部にて行われますが、当科では臨床的立場からその診断内容を検討し、綿密な治療方針を定めています。さらに、急性および慢性腎不全の診療では、保存的治療だけでなく、末期腎不全における透析療法を行っています。平成19年6月には血液浄化療法センターが西別館4階に移転し、現在25血液透析用ベッドで運用されています。将来は30ベッドまで増床する予定で、大学病院としては屈指の規模を誇っています。さらに、血液

透析の技術を応用した血液浄化療法として、血漿交換療法やLDLアフェレシス、免疫吸着療法が可能であり、必要に応じ腎疾患、膠原病および自己免疫疾患に対し行われています。さらに透析療法の一環として、持続的携行腹膜透析療法(CAPD)も実施されています。研究面では、リポ蛋白糸球体症モデルマウスの作成、糖尿病性腎症モデルラットの基礎的研究、腎疾患における脂質代謝異常の解析、難治性ネフローゼ症候群における治療研究などが進行中です。

腎臓・膠原病内科(膠原病)に関しましては、中島衡(准教授)、三宅勝久(講師)二人のスタッフを中心に対応しております。関節リウマチは、生物学的製剤の開発により、その治療形態が大きく変わろうとしていますし、血管炎をはじめとして、膠原病の病態を

理解する上では、免疫学的機序を想定し、病態を創りだしているサイトカインの制御という点から治療方針を立てています。リウマチ・膠原病は、全身性の炎症性の疾患ですから、腎臓専門医に囲まれた中での診療は非常に有難く、また整形外科、呼吸器内科、皮膚科などの多くの関連診療科の先生から有益なアドバイスを頂けることが、診療の質を高めていると感じています。毎日のリウマチ・膠原病診療の中で疑問に感じたことを研究に結びつけたいと思っております。

私たちの教室の関連施設としては、福西会病院、福岡県済生会福岡病院、福岡県済生会二日市病院、西福岡病院、村上記念病院等があり、同門の指導医のもと教室からの出張医師も診療に携わっております。

平成20年5月には当科主任で日本腎臓学会学術総会を開催いたしました。参加者数は4200人を越え、過去最高を記録しました。第一線で活躍している腎臓分野の臨床

家、研究者により、世界的にトピックスとなっている慢性腎臓病(CKD)をはじめ、さまざまな話題について発表がなされました。同窓の先生方のご協力に、改めて感謝申し上げますとともに、今後ともご指導の程宜しくお願い申し上げます。



福岡大学医学部 神経内科学

神経内科医局長 馬場 康彦 (講師・20回生)

平成10年に内科・健康管理科として講座が開設され、その後は内科の再編に伴い講座名も変更され、平成20年4月から現在の名称である神経内科学となっています。院内の人員は山田達夫教授、坪井義夫準教授、宗清正紀講師(健康管理科)、馬場康彦講師(医局長)、小林智則助教、井上展聡助教(病棟医長)、合馬慎二助教(外来医長)、尾畑十善助教、津川潤助教、玉木慶子助手、樋口正晃助手、小野澤里衣子助手の計12名で構成されています。

神経内科学では神経変性疾患、脳血管障害、脱髄性疾患、感染性疾患、代謝性疾患、末梢神経・筋疾患など多岐にわたる神経疾患に対し、より専門性の高い医療を提供することを目的とし、日々の診療を行っています。認知症性疾患に関しては「物忘れ外来」による専門診療を行っており、神経心理検査と併せて最新の画像学的解析を用いた診断を行っています。特にアルツハイマー病に対しては薬物療法に加えて介護福祉にも介入し、包括的医療を実践しており、大分県宇佐市安心院地区において高齢者の生活

習慣介入による認知症予防活動を行っています。また、今後は北九州市での認知症疫学調査などにも取り組む予定です。薬物治療に抵抗性を有するパーキンソン病や本態性振戦に対しては、脳神経外科と協力し深部脳刺激療法を行っており、良好な運動症状の改善効果が得られています。脳梗塞超急性期例に対しては救命救急センターと協力し24時間体制で経静脈的血栓溶解療法を行っています。その他、顔面攣縮、眼瞼痙攣、痙性斜頸などの不随意運動を呈する疾患に対しA型ボツリヌス毒素(ボトックス)による治療を行っています。

研究面では、アルツハイマー病に対して非薬物療法による認知症の進行抑制効果において成果が認められています。また、ABCG4遺伝子とアルツハイマー病におけるアミロイドβ分泌の影響を検討しています。パーキンソン病に関しては、非運動症状の臨床研究、免疫異常と病態発現との関連性の検討、モデル細胞を用いたドパミン作動薬の神経保護作用の検討や、遺伝性パーキンソン症候群におけるタウ遺伝

子解析などを行っています。

昨今、大学病院からの研修医離れが大きな問題となっていますが、この影響は当医局においても無関係ではなく、これまで神経内科入局者の母体となっていた大学研修医不足は過去5年間で入局者無しという現状を生みました。しかしながら、今春より小野

澤里衣子先生が待望の新入局員として加わることとなり、安堵の胸をなでおろしています。

今後も高い診療レベルを維持し医療連携を密接にすることで、地域社会により大きく貢献できるよう尽力したいと考えています。

福岡大学医学部 小児科学

小児科医局長 井上 貴仁 (助教・15回生)

第4代廣瀬伸一教授のもとに新しい福岡大学小児科学教室がスタートし3年が経ちました。診療はもちろんのこと研究、教育においても医局員全員が意欲的に取り組んでいます。

■診療

年間外来患者数は約17,000名で、年間入院患者は1,000名を越えています。

小児救急医療の重要性が認識されている現在、救急患者の受け入れ要請に積極的に対応しております。福岡市立こども病院の人工島移転も計画されており、今後はこれまで以上に小児疾患の患者の増加が見込まれます。

■研究・学会

研究面では各専門グループが常に最新医学の研究を行っています。その目的は「病める子どもたちのため」と皆強く信じ取り組んでいます。国際学会にも積極的に演題発表を行っています。

■教育

臨床研修プログラムの必修科目として、研修医の指導を行っています。

B S Lでは、自主性を尊重し、可能な限り子どもたちと接する時間をとり、まさにbed sideの学習を実践しています。

■その他

福岡大学小児科ワークショップを年1回行っています。福大関連病院の医師、看護師が一同に会し、テーマを決め、全員で熱い討論を行っています。

現在、少ない子どもをより大切に育てたいという傾向が強まり、小児科医の需要が増してきています。また、専門的な知識や高度な医療技術を持ち、子どもの心の問題にも対応できる小児科医を望む親も増えてきており、小児科医には広汎な領域に対応することが求められています。福岡大学小児科は、持ち前の明るさとチームワーク、フットワークの良さでこのようなニーズに答えるべき努力を続けていく所存です。

紙面の関係上本文でご紹介できなかった情報がまだまだたくさんあります。福岡大学小児科ホームページでその魅力をご確認いただけます。どうぞお気軽にアクセスしてみてください。



福岡大学医学部 皮膚科学

皮膚科医局長 高橋 聡 (講師・21 回生)

当科は現在、中山樹一郎教授のもと、今福信一准教授、高橋聡講師、他に助教 4 人、助手 4 人、大学院生 2 人、ローテイトの研修医数名で構成されています。また経験豊富な医師を第一線の医療機関に派遣しています。

月曜から土曜日まで毎日午前中に一般的な皮膚疾患、いわゆる湿疹・皮膚炎、中毒疹、真菌症など全般的な外来診療を行っており、午後には専門外来として膠原病・アレルギー、神経線維腫症、乾癬・脱毛、美容、腫瘍外来を専門の医師が行っています。また悪性腫瘍などの全身麻酔の手術は毎週火曜、木曜日に行います。当科の特徴としては一般の皮膚疾患から、膠原病・アレルギー、それと近年注目が高い各種レーザーやピーリングによる美容皮膚科、また皮膚悪性腫瘍に対する高度な手術など内科的要素から外科的要素まで幅広く専門として診

療にあたっています。特に高齢化に伴い増加傾向にある皮膚がん診療に力を入れており、現在国立がんセンター中央病院と静岡県立がんセンターに 3 年間レジデントとして医師を派遣しています。将来的にはより強力な“がん診療チーム”をつくりたいと思っております。皮膚科学教室を今後とも宜しく願ひ致します。



福岡大学医学部 脳神経外科学

脳神経外科医局長 大城 真也 (講師・11 回生)

脳神経外科学は人の生命や神経機能に直接関係する脳・脊髄疾患に対して、特に外科的な立場より治療を担う分野であり、医療の根幹をなす領域といっても過言ではない。主な対象疾患は脳腫瘍、脳血管障害、頭部外傷、脊髄脊椎疾患、先天奇形を含む小児疾患、また顔面けいれんやパーキンソン病などの機能的疾患など多岐にわたる領域を扱う診療科である。当教室は昨年 4 月より第 3 代目の主任教授として井上亨先生を迎え、頸動脈内膜血栓剥離術 (CEA) や虚血性病変に対するバイパス術などの血管障害例が著増している。なお血管障害の増加に伴い必然的にカテーテルを用いた低侵襲的な血管内治療・手術例も増加している。当院の高度救命救急センターでは 24 時間体制にても膜下出血などの脳

卒中や重症頭部外傷に迅速に対応しており、地域の拠点病院としての役割は常に大きい。また関連施設には福岡赤十字病院、福岡市民病院、福岡市東医療センター、白十字病院などがあり、そこでの研修プログラムも充実している。現在、特に力を注いでいる領域はナビゲーションを用いた安全・確実な手術や神経内視鏡を用いた低侵襲手術であり、医局内には実際の手術に用いる顕微鏡や内視鏡を装備し、実体験のできる訓練設備も充実している。夢と志のある研修医・学生なら誰でも見学・活用できるので、是非とも門戸を叩いてほしい。

連絡先：脳神経外科医局

(e-mail:s-oshiro @ fukuoka-u.ac.jp)

福岡大学医学部 消化器外科学

消化器外科医局長 篠原 徹 雄 (講師・12 回生)



平成18年10月1日に外科学講座再編が行われ、外科学第一と外科学第二の消化器外科グループは外科学講座消化器外科となり、山下裕一教授のもと統一されました。専門グループとして、臓器縦割りでの食道グループ、胃グループ、大腸グループ、肛門疾患グループ、肝臓グループ、膵臓グループ、横割りでの内視鏡外科グループ、外科総論グループで活動・診療を行っています。診療面では、外来は月曜日

～土曜日までで、月間の平均外来患者数は約1100名です。ベッド数も85床で月平均新規入院患者数約110名、手術日は月曜日～金曜日までで全麻症例で年間約800例を数え、大腸癌手術症例数は、昨年度九州1位でした。腹腔鏡下手術、肝切除術、生体肝移植など多くの治療手技に取り組んでいます。また膵臓疾患は、ERCPが年間300例を超えています。研究面では、消化器癌の臨床・基礎医学研究、手術手技に関する研究など今後に発展させたいと努力しています。肝臓移植臨床修練にロイヤルコペンハーゲン大学病院外科(デンマーク)に派遣し、当科での肝移植にフィードバックしています。このように当教室では消化器疾患のジェネラリスト・各臓器のスペシャリスト(専門医)育成にも力を入れています。



福岡大学医学部 形成外科学

形成外科医局長 蔡 顯 真 (助教)

当科の歴史は、1990年後に初代教授となる大慈弥裕之が中心となり、福岡大学整形外科教室内に発足した形成外科診療班から始まりました。発足当初は、わずかに3名のスタッフで診療に従事していましたが、年々順調な成長を遂げて1996年に診療科に昇格しました。2005年には、大慈弥裕之が初代教授に就任し福岡大学病院形成外科が誕生しました。さらに2007年より講座化され、より一層に臨床と研究に邁進できる体制が整いました。

現在、医局員は31名となり、そのうち12名が福岡大学病院に勤務しています。当教室の診療・研究の主な柱は、創傷管理・小児形成・再建外科・抗加齢医療の4つです。

創傷管理では、糖尿病内科、腎臓内科、整形外科、皮膚科、心臓外科と合同でフットケアチームを今年3月より立ち上げ、既存の褥瘡回診とともに糖尿病性足病変や褥瘡の治療に当たっています。また、この分野の研究として、感染創での菌の局在解明に力を注いでいます。

小児形成では、Nuss法による漏斗胸手術を早期から導入し、この術式における内視鏡操作時に視野確保のための「福大式胸骨挙上鉤」を開発しました。再建外科では自家組織による乳房再建に尽力しており、皮弁組織内の血管造影を行い、血管解剖の解明を行っています。昨年暮れより三次元形状計測装置(DANAE)を導入し、乳房や眼瞼手術時の術前シミ

ュレーションと術後評価を開始し、研究分野が多様化しています。抗加齢医療では、2年後の新診療棟建設に伴い、皮膚科と合同で美容医療センターを開設し、スキンケアから手術まで社会のニーズに答えた総合的美容医療を目指しています。2007年度より福岡歯科大学病院内に口腔顔面美容センターを開設しました。また、院外活動として、2006年度より福岡-釜山形成外科交流会を立ち上げ、韓国の形成外科医との学問的交流を深めています。

福岡大学病院形成外科のホームページ
(<http://www.med.fukuoka-u.ac.jp/plastic/index-j.html>)を制作しています。
ぜひご覧ください。



文責: 蔡 顯真、助教、H.20 年度 医局長
E-mail: bbrss3@movie.ocn.ne.jp

福岡大学医学部 整形外科学

整形外科医局長 佐伯和彦 (講師・15 回生)

みなさんこんにちは! 福岡大学整形外科学教室は1972年4月に開講以来、今年で37年目を迎えます。

現在の教室の構成は教授の内藤正俊先生、准教授の柴田陽三先生、講師5名、助教5名、助手8名、大学院生11名、研究生2名、研究員1名、院外研修45名、秘書さん4名と同門会会員251名、関連病院22施設と大所帯の教室です。当教室は大所帯ではありますが、先輩、後輩問わず、仲が良く、チームワークが良いのが最大の特徴です。そのおかげで全国的な医師不足が叫ばれるなか、当教室では昨年度が9名、今年度は8名の新入医局員を迎え、さらに活気づいています。診療では運動器の障害を迅速に回復させることを念頭に、平成19年度の外来患者数は25,188人、手術件数も1,313例と年々増加し、難易度の高

い手術や難治性の疾患にも取り組んでいます。また、国内外での学会・論文発表が平成19年度は185回と多く、一般の方や学生さんに対するスポーツ障害の予防・治療の講義や講演を行っています。今後も当教室は、医局員一同、皆さんに愛され必要とされる教室を目標に邁進してまいりたいと思いますので、よろしくお願い致します。



日整会サッカー地区予選優勝記念

福岡大学医学部 眼科学

眼科医局長 尾崎 弘明 (講師)

眼科学教室は内尾英一教授が主任教授として赴任されはや5年目を迎えました。内尾教授はアレルギー疾患、免疫疾患、角結膜疾患の専門です。他のスタッフは林英之教授、近藤寛之講師(外来医長)、尾崎弘明講師(医局長)、小沢昌彦講師(病棟医長)、3名の助教、8名の助手、大学院生と卒後研修の医師から構成されています。現在関連病院を含めると総勢46名の教室員をかかえています。本年度は7名の医師が入局し、教室は大変若返っています。



外来は週日は毎日の診療で、午後に眼炎症、緑内障、網膜硝子体、小児眼科などの専門外来を設けています。手術日は週2日で、角膜移植や硝子体手術、緑内障手術などで年間850例程度の症例をこなしています。

関連病院は非常に充実しており、久留米聖マリア病院、村上華林堂病院、福岡赤十字病院、唐津赤

十字病院、済生会八幡総合病院、佐世保共済病院、福岡徳洲会病院、和白病院、白十字病院、田主丸中央病院、百道浜山王病院、タカオ眼科に常勤医師を出向させています。

内尾教授を中心とした和気藹々とした雰囲気のある教室ですが今後とも皆様からのご指導、ご鞭撻を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

福岡大学医学部 耳鼻咽喉科学

耳鼻咽喉科医局長 宮城 司道 (講師・9回生)

当科は耳鼻咽喉科・頭頸部外科として診療を行っている。耳疾患は微細操作が必要な耳硬化症に代表される中耳難聴、外耳癌・難治性内耳性めまいなどの手術治療を行う。高度先端医療として注目される補聴器無効な高度難聴成人には人工内耳手術も行う。先天性を含む小児難聴の支援として、補聴器の適応判定や交付・人工内耳まで含めて、福岡県内のろう学校やことばの教室、言語療育センターと協力して取り組んでいる。顔面神経麻痺は、多くが末梢性で、改善不良と判断された時には顔面神経減荷術によって治癒促進の可能性もあるため、発症直後の受診・紹介を勧めている。各種鼻疾患には内視鏡を用いた低侵襲手術が良好な成績をあげている。頭頸部悪性腫瘍については、放射線科、形成外科、歯科口腔外科などと連携をとりながら、QOLに配慮し、より効果的な治療に取り組んでいる。

耳鼻咽喉科病棟はほぼ満床の状態だが、顔面外

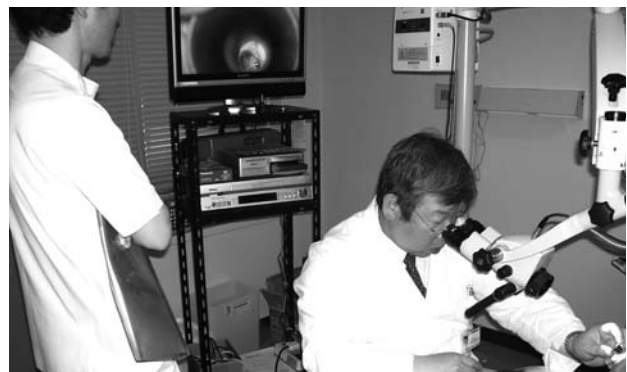
傷・鼻出血・急性炎症など急患にもできるだけ対応できるように努力している。

〈特徴・特色〉

専門外来として・耳鳴・聴覚過敏を含めた難聴外来、めまい外来、補聴器外来、人工内耳外来、音声言語・嚥下外来、腫瘍外来を開設している。

宮城 司道

役職：講師、E-mail: mmiyagi1701@mac.com



福岡大学医学部 歯科口腔外科学

歯科口腔外科医局長 梅 本 丈 二 (講師)

歯科口腔外科学教室は、喜久田利弘教授を中心に講師1名、助教3名、助手5名、研修歯科医5名にて構成されており、全身疾患を有する患者の歯科治療（有病者歯科）と口腔外科を中心に臨床活動を行っています。有病者歯科診療では院内各科との連携をとり、他科治療（臓器移植、心臓弁置換手術や化学療法など）前後の患者の歯科治療や口腔ケア、抗血栓療法継続下での抜歯、止血管理などを行っています。口腔外科診療では、顎・顔面口腔領域の炎症や外傷、口腔粘膜疾患、歯の萌出異常、顎変形症、口腔内腫瘍、嚢胞などの疾患を治療しています。

研究面では、顎変形症手術時の最適な手術法と固定法、顎変形症術前後の3D-CTとコンピューターを用いた三次元的評価、プレートやネジの咀嚼圧に対する抵抗性の応力的研究などを行っています。

学生への教育面では、口腔内の細菌や疾患と全身疾患との関連性がわかる医師

へ育てて頂くように卒前教育を行っています。BSLでは患者さんを担当し、手術に参加してもらうなど歯科口腔外科の治療に接して頂いています。

今後も各科の先生方と協力して、福岡市における歯科口腔外科の基幹病院として医局員一同努力していきます。

連絡法:PHS 6753

歯科口腔外科学講座 内線 3535



福岡大学医学部 病理学

病理学 久 野 敏 (准教授)

平成14年4月1日付で旧第一病理学と旧第二病理学が統合し、福岡大学医学部病理学講座として新しく発足しました。福岡大学医学部病理学講座は福岡大学病院病理部と協力して診断、教育、研究にあたっています。病理学は基礎医学に所属していますが、臨床と常に一体となった業務内容です。臨床から出された標本の病理診断を行って、臨床はその診断を基にして治療方針を決定します。臨床サイドから病理へ求められている診断内容および診断技術は近年増え続けています。その期待に答えるべく我々は日々研鑽しています。

我々の教室は脳神経、血液、リンパ節、軟部組織、頭頸部、肺、心臓、血管、消化器、肝臓、胆嚢、膵臓、泌尿器、男性性器、女性性器、乳腺、内分泌、皮膚などの各臓器の診断を専門的に行うことができます。日本の大学病理学講座の中で、これほどにあ

らゆる分野を専門的に対応できる大学は他に類をみないと自負できます。一般染色（HE染色）に加えて、必要に応じて特殊染色、免疫染色（蛍光抗体法、酵素抗体法）、電子顕微鏡、in situ hybridization、laser captured 法による組織培養、PCR、Southern blotting、遺伝子解析などあらゆる技術を駆使して診断および研究を行っています。

大学の使命である研究に関して岩崎主任教授、竹下正教授、坂田教授、鍋島教授、久野准教授、中山准教授、溝口講師、二村講師、濱田講師、濱崎助教、青木助手、林助手、古賀助手のスタッフが悪性リンパ腫、白血病、骨軟部腫瘍、循環器疾患、脳腫瘍、消化管疾患、前立腺腫瘍、膵腫瘍、肺腫瘍、女性生殖器、男性生殖器、泌尿器、皮膚疾患、乳腺、腎生検病理を中心に行っています。各臓器の診断および研究は先程述べた手技に生化学的手法を加え

を行っています。得られた結果は毎年、欧米の一流学術誌に掲載され、日本のみならず欧米の学会で報告しています。また、これらの業績は臨床各科から研究にきている大学院生および研究生の学位論文になっています。

福岡大学医学部病理学講座は開講以来蓄積されてきたことを礎として、更に 21 世紀に適した教室と

して日々研鑽、努力を重ねて発展するよう全員ががんばっています。

文責：久野 敏（医局長、准教授）

連絡先：内線 3271

email:hisanos1@cis.fukuka-u.ac.jp

（1 はイチ、二、サンのイチ）

福岡大学病院 輸血部

輸血部医局長 熊川 みどり（講師）

輸血部は福大病院にて輸血が安全に行われる為の管理的な仕事と、患者さんの処置を行うと共に、輸血学について学生の教育を担当しています。このため専任医師が 2 名と技師 3 名の構成です。

輸血検査および血液製剤管理は技師が担当していますが、安全に輸血を行うための臨床各科への広報活動は、主として輸血部医師が行います。平成 17 年までは当院でのアルブミン製剤使用量が多く、厚生労働省の基準の 2 倍でした。アルブミン使用を減らす為の諸取り組みが奏効し、3 年間で基準値近くまで使用量を抑制しつつあります。

輸血部にて患者さんと接するのは、手術を受けられる方の自己血貯血時です。昨今若者の献血が減少していることもあり、自己血を貯めることが出来る全身状態の良い患者さんにおいては、貯血をさらに検討していただきたいと思えます。さらに体外循環としての白血球除去療法、および末梢

血造血幹細胞採取等も行っています。

安全に輸血を行うことは、病院における安全管理の大きな柱となります。このため輸血部では輸血に関するインシデント事例を解析し、輸血手順等を逐次見直し改善しています。しかし最終的には輸血を行う医師／看護師の方々の確認が最も重要です。



福岡大学病院 薬剤部

病院副薬剤部長／薬学部講師 緒方 憲太郎（福岡大学薬学部卒 第 28 回生）

福岡大学病院薬剤部は 1973 年の病院開設以来、調剤室、製剤室、薬品補給室、薬品管理室、薬品情報室および試験研究室を基本的組織構成として、地域医療への貢献と医学生、薬学生そして薬剤師への教育に携わってまいりました。また 2009 年 3 月現在では、薬学部教授と講師が各々薬剤部長と副薬剤部長を兼務し、薬剤師長、副薬剤師長および主任以下、総勢 50 名を超える大所帯となりました（嘱託、事務職、レジデントを含む）。

我々、薬剤師の使命には『医薬品適正使用への貢

献』と『ファーマシューティカルケアの提供』があり、これを実践すべく日々の業務、活動を見つめなおしてまいりました。

近年、『医薬品適正使用への貢献』として抗悪性腫瘍薬注射剤調製が新たな業務として加わりました。これは腫瘍センター、化学療法プロトコル審査委員会および化学療法委員会と連携をとりながら、病院全体として遂行しなければなりません。「第 3 次対がん 10 年総合戦略」にのっとり、がん医療の均てん化を図るべく、まずは標準的治療を効果的に、安

全に提供することを念頭に置き、医師、看護師とともにチーム医療を展開しています。

『ファーマシューティカルケアの提供』を実践する大きな場面として薬剤管理指導業務があります。我が国におけるファーマシューティカルケアの変遷は、1988年の入院調剤技術基本料新設に伴い、それまで薬剤師業務が調剤を主体としたものであったのに対し、その活動の場を病棟へと広げたところから始まりました。さらに1992年には医療法第1条の2に「薬剤師は医療の担い手」と明記されたことで、医療チームスタッフの一員と認められるようになりました。こうして始まった薬剤管理指導業務（薬剤管理指導料）は2000年までに、それに対する診療報酬が新設当初の14倍となり、現在ではさらに、所謂ハイリスク薬投与患者や救命救急入院料算定患者に対して等、細分化されるに至っています。2006年度には日本病院薬剤師会が、薬物療法のジェネラリストである薬剤師の中からスペシャリストを養成すべく専門薬剤師制度を立ち上げ、福岡大学病院薬剤部にも『がん専門薬剤師』が誕生致しました。すなわち遅ればせな



医学部5年生BSL（Bed Side Learning）風景

がら薬剤師活動も業務をこなす時代から専門家として医療に参加する時代へと入ったわけです。

『ファーマシューティカルケア』は「患者の保健及びQOL向上のため、はっきりとした治療効果を達成するとの目標をもって薬物治療を施す際の、薬剤師の姿勢、行動、関与、倫理、機能、知識、責務並びに技能に焦点を当てるものである」（1993年第2回WHO薬剤師の役割に関する会合）と、定義されています。これをチーム医療の中で実践するために薬剤師にも大きな期待がよせられていることを感じます。調剤、製剤にとどまらず医薬品情報提供、薬剤効果・副作用モニタリングのための薬物血中濃度モニタリングなど薬剤師としての全機能をさらに発揮できる薬剤師を育てるために薬学部も6年制を導入するに至りました。福岡大学病院薬剤部は、薬学生実習においても福岡大学や他大学からの実習生を受け入れており、未来の薬剤師養成に貢献しています。

最後に、福岡大学医学部5年生を対象としたBed Side Learning（BSL）を実施しており、薬剤師業務に対する理解を深めてもらっています。チームにはたくさん必要なものがありますが、特にリーダーは必要不可欠です。医療チームにおけるリーダーは医師です。医学生には是非、我々スタッフを牽引してくれる善きリーダーになっていただけることを期待しながらBSLを行っています。そして、そのリーダーに信頼される薬剤師養成、薬剤部作りに今後も努力していくものであります。

連絡先 院内 PHS；8 4 4 0

福岡大学病院 総合診療部

総合診療部医局長 北 島 研（助教・21回生）

総合診療部は開設5年目となった診療科で、これまで専門内科外来への紹介状を持たない患者を中心に外来での診断と初期治療を行って参りました。2009年1月からは新オーダーリングシステムの導入に合わせるように、入院病床を始めました。現在6階北病棟に2床頂き、外来で診断が付かない場合や入院加療が必要な場合に病床を使用しています。これからもジェネラリスト養成の場として奮起するつもりです。



写真は二〇〇九年二月に撮影し、上段左から鍋島診療部長（二三回生）、柏木、増井（二九回生）、下段左の北島（二一回生）を含めて六人で診療にあたっています。

福岡大学病院 臨床研究支援センター

臨床研究支援センター センター長 野田 慶太 (准教授・6 回生)

当院では、治験にかかわる業務を支援するため、平成 13 年 7 月に治験管理室 (室長 朔啓二郎教授)として誕生しました。治験とは、国から医薬品として承認を受けるために行う臨床試験で、人における有効性と安全性を調べることを目的としています。



平成 17 年 4 月には、臨床研究の倫理審査の支援を行うようになり、現在の部署名に変更となりました。平成

18 年 4 月より 2 代目のセンター長として、治験コーディネーター (CRC) 8 名、専任薬剤師 1 名、事務員 3 名とともに研究者の支援を行っています。ちなみに CRC とは、治験がスムーズに行えるように被験者 (患者)、治験依頼者 (製薬企業)、治験担当医師を支援する者で、当院では看護師資格を持つ、訓練を受けたものが担当しています。

平成 19 年には厚生労働省から治験活性化事業の一環として、治験拠点病院に指定され、補助金を受けるという名誉を頂きました。

医学の発達とともに、新薬が次々と開発されていますが、すばらしい効き目を備えた副作用の少ないスーパードラッグの誕生には、多くの患者さんの協力が必要です。当センターは、そのお手伝いができればと考えています。

福岡大学病院 臨床工学センター

臨床工学センター センター長 田代

忠 (心臓血管外科部長、特別会員・教授)

1. 臨床工学技士とは

1987 年 (昭和 62 年) 5 月に制定された「臨床工学技士法」に基づく医学と工学の両面を兼ね備えた国家資格です。

・医師の指示の下に、生命維持管理装置の操作及び保守点検を行う事を業とする医療機器の専門医療職種です。

2. 臨床工学センターの成り立ちについて

2003 年 4 月、医師 1 名、技士 5 名で手術部の一室に開設、現在は医師 1 名、技士 13 名の体制です。2 年後の新診療棟の開設後にセンターを移転する予定です。

3. 臨床工学センターの組織編成と臨床工学技士業務の概要について

- 1) 血液浄化療法センター
 - ・月曜から土曜日まで昼、夜の 2 クールで稼働。
- 2) 手術部、SICU (術後集中治療室)
- 3) 救命救急センター、総合周産期母子センター
 新生児部門、各病棟

4) 血管造影室での補助循環装置の操作

5) 医療機器保守管理

- ・院内の医療機器の購入、機器貸出、修理、保守点検、廃棄に至るまで

4. 医療機器に関する情報提供について

- ・院内全職員対象の研修、医療機器に関する安全情報の提供として院内広報紙「臨床工学通信」発行、院内ニュース上での安全情報掲載などを行っている。



福岡大学病院 卒後臨床研修センター

卒後臨床研修センター長 比 嘉 和 夫 (福岡大学医学部麻酔学教授・特別会員)

新医師臨床研修制度が2004年に施行され、大学病院を含めた研修指定病院は、どれほど多くの研修医が勤務しているかということで評価されるようになっていきます。

表に医科と歯科の研修医のマッチングの結果を示します。例年、多くの応募はありますが、定員よりも少ない採用者数になっています。多くの原因があったと思います。

内藤病院長の強い要望で、平成20年度から研修医の給与が増額になりました。そして、医師・歯科医師としての研修に、より専念できるように、医師、看護師、事務職員が、仕事を相互に補いあうことが検討されています。

厚生労働省は平成22年度から、医科の臨床研修制度を大きく変更するようです。最初の1年間は、内科、救急部門、地域医療が必修になり、後半の1年間は研修医が選べる科目と期間が相当自由になるようです。福岡大学病院での、平成22年度からの医科の研修プログラムの変更に、早急な対応が必要です。

目的は一つです。各科に有意義な研修とするのではなく、研修医に有意義な研修となることです。多くの方々のご協力が必須でございます。宜しく願い申し上げます。そして、ご意見を、卒後臨床研修センターにいただければ幸いです。

卒後臨床研修センター 内線 4231

表 医科・歯科臨床研修マッチングの推移

医師臨床研修マッチング状況

採用年度	募集定員	応募者数			マッチ者数			マッチ率	採用者数		
		本学	他学	計	本学	他学	計		本学	他学	計
平成16年度	63	96	29	125	58	5	63	100%	50	4	54
平成17年度	63	104	22	126	57	6	63	100%	48	2	50
平成18年度	63	110	13	123	54	9	63	100%	43	9	52
平成19年度	63	103	20	123	52	8	60	95.2%	39	7	46
平成20年度	63	60	18	78	25	10	35	55.6%	25	8	33
平成21年度	55	102	23	125	44	11	55	100%	40	10	50

臨床研修歯科医マッチング状況 (応募者は全員他学)

採用年度	募集定員	応募者数	マッチ数	マッチ率	採用数
平成18年度	4	18	4	100%	3
平成19年度	4	14	3	75%	1
平成20年度	4	12	4	100%	3
平成21年度	4	24	4	100%	4

会員寄稿

東京大学産学連携プロジェクト(EIR)への挑戦～挫折と再生～

東京大学病院形成外科 三原 誠 (25 回生)

内閣府・文部科学省・経済産業省の意向を受けて、今年度より東京大学において新しい産学連携プロジェクトが創設・開始された。大学の研究成果を、速やかに社会に還元するべく、大学と企業とが連携して事業計画書・研究計画書を作成していくものである。東京大学において初めての試みということもあり、今年度の採択予定プロジェクトは 2 件 (IT 部門 1 件、バイオ部門 1 件)、研究計画・事業計画書作りのための予算も各 1000 万円・東大内の独立した研究室の割り当てと、大変恵まれたプロジェクトである。これまでのプロジェクトと異なる条件は、学術的な研究成果に加えて、経済的な成功も要求されている点である。

東京大学では昨年 8 月よりこのプロジェクトに関する応募が始まり、今年 4 月にプロジェクト決定、5 月よりプロジェクト始動とされていた。私は、「臓器凍結 (卵巣凍結も含む) プロジェクト」を提案し、第一次書類審査、第二次面接審査、第三次事業化計画審査も無事に通過し、晴れてこの東京大学初の産学連携プロジェクトに採択された。(東京大学内の研究者から提案された) たくさんの応募の中から採択されたこともあり、この時点では新しいプロジェクトに挑戦できる喜びでいっぱいであった。7 月には東京大学内に研究室 (63m²) 『Mihara-Lab』も割り当てられ、本格始動することとなった。バイオ系基礎研究者も常勤で 1 人、非常勤で 3 人を雇用し、心臓・肝臓・腎臓・脳・癌細胞・血液・膵臓の凍結実験を開始した。共同研究先も、ハーバード大学移植外科、東京医科大学人体構造学分野、つくば霊長類医科学センター、慶応大学産婦人科、国立癌センター中央病院、国立生育医療センターと様々な研究背景を有する先生方に声をかけて協力をお願いした。外来・手術・病棟業務を行いながらの、研究遂行であったため平日深夜・土日を中心としたプロジェクト管理であった。

研究を進めるにあたって、2 つの大きな障害にぶつかった。1 つ大きな障害は、「事業計画書作成」である。科学研究費補助金やその他の研究助成金と異なり、今回のプロジェクトは、学術的な研究成果のみならず、研究を遂行することで経済的・ビジネス的な

成功を収めることが前提条件とされていた。しかしながら、私たちも含めて、周囲にビジネス上の知識を有する研究者は皆無である。大学に関する税理士、公認会計士、MBA 取得者、法律家にもいろいろと声をかけたが、アメリカのバイオ・ビジネス市場と異なって未熟な日本のバイオ・ビジネス市場では、経営学の専門家たちも経験のないプロジェクトであった。もう 1 つの大きな障害は「大学内における科学とビジネスの不調和」である。アメリカでは、大学内の研究開発は経済的な成功を前提とされている。しかしながら、日本の科学界においては、大学における研究開発と経済的な成功は相反するものと捉えられている。このような考え方の相違より、徐々に東京大学内においても、共同研究先においても温度差が生じ、最終的に研究・事業化計画ともに当初の予定から大幅に遅れることとなった。

かくしてこの 12 月 31 日をもって、これらの 2 つの障害が解決できないと東京大学産学連携本部より判断され、私の産学連携プロジェクトはあえなく終了となった。あつという間の 8 ヶ月間であった。世界大恐慌の影響も多分にあった。残念な結果ではあったが、その間に 33 歳という年齢では到底経験できないような多くのことを学んだ。自分の責任において、研究計画・研究体制・共同研究先のマネジメントすること。常勤 1 人、非常勤 3 人の研究者たちのモチベーションをマネジメントすること。異分野研究者との連携、研究情報共有のマネジメント。特許を柱とした知的財産権取得のための研究戦略構築。企業家・投



資家への説明責任。大学内経理部・産学連携本部との斥候。アメリカと日本の大学におけるバイオ研究の考え方の相違、バイオベンチャーの難しさ。基礎研究と臨床とのスケジュール管理の難しさ。医局内の上司・同僚への説明義務。社会的にエリートとされている東京大学出身・在学中の研究者を雇用すること。学ぶべきことはたくさんあった。反省することもたくさんあった。プロジェクト期間中、頭を抱えることは幾度となくあった。この産学連携プロジェクトを通して、確信したことが1つだけあった。異分野の専門家を束ねるにあたり、自分自身の「コミュニケーション

能力」を磨く必要性であった。医学界の中で通用していた専門用語は、他の領域ではまったく理解されない。頭の中で上手に噛み砕き、相手の心に届くキーワードとして翻訳する作業は、今後の研究遂行のために絶対に必要な能力であることを確信した。月並みではあるが、様々な挫折の経験より得た1つの結論であった。

写真は、研究メンバーの集合写真である。医学系、理学系、メディア関係者、患者さんも含めて多種多様なメンバーを集めてのディスカッションを行っている。(筆者は前列左から2人目)

福岡大学医学部同窓会

在外研究援助金 募集要項

対 象：正会員、準会員及び学生会員（本会会費完納を条件とする）で医学の研究または医療技術の習得のため、3ヶ月以上外国に留学する者

申請方法：所定の申請書により留学出発3ヶ月前までに提出の事

提 出 先：〒814-0180 福岡市城南区七隈 7-45-1 福岡大学医学部同窓会事務局
TEL 092-865-6353（直通） 代表 092-801-1011 内線 3032
FAX 092-865-9484

援 助 金：1件20万円を限度とし、年間10件以内

発 表：その都度、同窓会会報に掲載

そ の 他：①受給者は帰国後その成果を総会で口演するか同窓会会報に発表する事
②申請書は同窓会事務局に請求又は烏帽子会ホームページからダウンロードの事

※準会員・学生会員の方もご応募下さい。

平成20年度在外研究援助金受給者名簿

姓 名	回・学年	勤 務 先	地位役職	留 学 先
前 山 彰	25	福岡大学大学院医学研究科病態機能系	福大大学院生	アメリカ ピッツバーグ大学
伊 東 威	22	福岡大学医学部再生・移植医学	博士研究員	アメリカ テキサス ベーラー大学
山 本 希 治	26	山元記念病院消化器科		デンマーク コペンハーゲン大学病院
井 上 浩 利	25	福岡大学大学院医学研究科病態機能系	福岡大学大学院医学研究科病態機能系	スウェーデン ウメオ大学
木 山 貴 彦	24	福岡大学病院整形外科	福大助手	アメリカ ジョージア大学

訃 報

正会員	石 田 秀 樹 先生	平成 20 年 11 月 5 日	ご逝去 (2 回生)
正会員	小田島 安 平 先生	平成 21 年 2 月 7 日	ご逝去 (3 回生)
正会員	増 田 博 子 先生	平成 21 年 2 月 26 日	ご逝去 (7 回生)
正会員	河 野 通 孝 先生	平成 21 年 3 月 17 日	ご逝去 (4 回生)

追 悼

福岡大学医学部 小児科学教授 廣 瀬 伸 一 (3 回生)



同級生として、同じ小児科医として小田島安平君の逝去を悼み、ご冥福を祈りたい。

小田島君と私は福岡大学の同期として6年間福岡大学の学窓をともにした。昭和55年の卒業時、同級の11名が福岡大学の小児科に入局したが、小田島君は国立病院医療センターの小児科で研修を始めた。その後は、小児アレルギーを専門とし、東松山市立市民病院小児科医長、千葉県こども病院呼吸器アレルギー科医長、都立広尾病院小児科医長と有名病院の要職を務めた。こうして次第に小児アレルギーの新進気鋭の専門医として、小児科学のなかで皆一目置く存在になった。この頃、はじめて私のなかで、小児科アレルギーで著名な「小田島先生」と僕らの同級の小田島安平君が重なり、驚きと共に嬉しく思ったのを記憶している。その後、彼も私同様、大学人としての道を進み、昭和大学医学部小児

科の講師、助教授、客員教授を経て、平成17年5月埼玉医科大学小児科教授に就任した。これは福岡大学医学部同窓で初めての小児科の教授の輩出であった。同窓生一同、とりわけ小児科医になった者にとってはまばゆいばかりの快挙であり、喜びであった。小生も、彼の活躍に触発され福岡大学小児科の教授になることが出来たと、彼に感謝している。

このため、新しく福岡大学小児科で立ち上げた福岡小児科セミナーという定例勉強会の、第一回目の講師には迷わず小田島安平君をお呼びした。昨年の2月22日、ホテルニューオータニ博多で開かれたこのセミナーには福岡市や福岡県の小児科医ばかりでなく、小児科以外の同窓生もたくさん集まってくれた。彼の講演は期待にたがわず素晴らしく、同級生として小児科医として嬉しく誇らしく思った。しかしながら、これが彼とのお別れになってしまうとは。セミナーで凛々しく講演する姿、懇親会で久しぶりの同級生と歓談する姿が、いまでもまぶたに浮かぶ。

彼の天逝は、家族、知人の悲しみは言うに及ばず、小児科学ひいてはアレルギーに苦しむ子どもたちの悲しみでもある。同じ小児科学を学ぶ者として、彼の遺志を継ぎ小児科学の発展に尽くすことが、彼への弔いになればと今は願うしかない。

小田島安平君安らかに眠りたまえ。

医局長・医長名簿

(○内の数字は卒業回、筑紫病院の※印は内科第一・第二・消化器科の代表医長)

平成21年4月現在

	医局長	病棟医長	外来医長
[福大病院]			
腫瘍・血液・感染症内科	石塚賢治	石津昌直 ⑳	田中俊裕 ⑰
内分泌・糖尿病内科	安西慶三	工藤忠睦 ㉒	明比祐子
循環器内科	河村彰 ⑰	藤見幹太 ⑱	岩田敦 ⑳
消化器内科	岩田郁 ⑬	山口真三志 ⑱	入江真 ⑬
腎臓・膠原病内科	中島衡	小河原悟 ㉑	三宅勝久
呼吸器内科	藤田昌樹	豊島秀夫 ⑧	白石素公 ⑪
神経内科・健康管理科	馬場康彦 ㉔	井上展聡 ㉑	合馬慎二 ㉓ (神経)
〃			宗清正紀 (健管)
精神神経科	田中謙太郎 ㉕	吉田公輔	永井宏 ㉒
〃 (ディケア)			平川清人
小児科	井上貴仁 ⑮	森島直美	田中美紀 ⑰
消化器外科	篠原徹雄 ⑫	星野誠一郎	松尾勝一 ⑪
呼吸器・乳腺内分泌・小児外科	吉永康照 ⑪	濱武大輔 ㉔	今給黎尚幸 ⑲
整形外科	佐伯和彦 ⑮	西尾淳 ⑱	金澤和貴
形成外科	萩家康弘	西平智和 ㉖	衛藤明子
脳神経外科	大城真也 ⑪	安部洋 ㉔	八尋龍巳 ㉔
心臓血管外科	竹内一馬 ㉔	林田好生 ㉔	西見優
皮膚科	高橋聡 ㉑	伊藤宏太郎 ㉖	古賀文二 ㉓
泌尿器科	松岡弘文 ⑧	中村信之 ⑩	入江慎一郎 ⑰
産婦人科	辻岡寛 ⑮	野尻剛志 ㉑ (3東)	小濱大嗣 ⑮
〃		堀内新司 ⑱ (3北)	
眼科	尾崎弘明	小沢昌彦 ⑮	近藤寛之
耳鼻咽喉科	宮城司道 ⑨	末田尚之 ⑰	山野貴史 ⑱
放射線科	高野浩一 ⑭	浦川博史 ⑮	井田樹子 ⑱
麻酔科	香取清 ⑬	平田和彦 ⑫	平田和彦 ⑫
歯科口腔外科	古田治彦	瀬戸美夏	青柳直子
病理部	久野敏		
臨床検査部	松本直通 ⑭		
輸血部	熊川みどり		
救命救急センター	喜多村泰輔 ⑯	田中潤一	
総合周産期母子医療センター		中村公紀 ⑯	
総合診療部	北島研 ㉑	柏木謙一郎	鍋島茂樹 ⑬
東洋医学診療部	久保田正樹 ⑭		
[筑紫病院]			
筑紫病院 (総医局長)	富田健一 ㉑		
内科第一	山之内良雄 ⑦	東條秀明 ⑰	三好恵 ⑮
内科第二	※富田健一 ㉑	久良木隆繁	飯野研三
消化器科・内視鏡部	高木靖寛 ⑮	平井郁仁 ⑭	光安智子
小児科	深町滋 ⑱	城谷吾郎	鶴澤礼実
外科	三上公治 ⑬	永川祐二 ⑲	富安孝成 ㉓
整形外科	秋吉祐一郎	篠田毅 ㉓	毛利正玄 ⑯
脳神経外科	鬼塚正成	堤正則	相川博
泌尿器科	石井龍 ⑤	平浩志 ⑮	石井龍 ⑤
眼科	吉田茂生	吉田茂生	佐伯有祐
耳鼻咽喉科	一番ヶ瀬崇 ⑲	一番ヶ瀬崇 ⑲	上野哲子 ㉔
放射線科	中島力哉 ⑭		
麻酔科	生野慎二郎 ⑧		
病理部	原岡誠司		
救急部	紙谷孝則 ⑮		

教育職員人事（講師以上）

（○内の数字は福大医学部卒業回）

[平成 20.10.1 ~ 21.4.1]

区分	所属	資格	氏名	発令日	摘要
昇格	筑紫脳神経外科	教授	風川 清	20.10.1	
	筑紫泌尿器科	教授	平塚 義治	20.10.1	
	腫瘍・血液・感染症内科学	准教授	高松 泰	20.10.1	
	病理部	准教授	久野 敏	20.10.1	
	整形外科	准教授	副島 修 ^⑨	20.10.1	
	生理学	講師	森 誠之	20.10.1	
	小児科学	講師	安元 佐和 ^⑦	20.10.1	
	消化器内科	講師	釈迦堂 敏	20.10.1	
	消化器外科学	講師	星野 誠一郎	20.10.1	
退職	総合医学研究センター	教授	池田 靖洋	21.3.31	定年退職
	総合医学研究センター	教授	白日 高歩	21.3.31	定年退職
	筑紫脳神経外科	教授	田中 彰	21.3.31	定年退職
	手術部	講師	松永 万鶴子	21.3.31	定年退職
	皮膚科学	准教授	久保田 由美子	21.3.31	
	形成外科学	准教授	小坂 正明	21.3.31	
	整形外科	准教授	副島 修 ^⑧	21.3.31	
	筑紫消化器科	准教授	津田 純郎 ^⑥	21.3.31	
	小児科学	講師	新居見 和彦 ^⑤	21.3.31	
	総合周産期母子医療センター	講師	浅部 浩史	21.3.31	
	腫瘍・感染症・内分泌内科学	講師	木村 暢宏	21.3.31	
	放射線部	講師	中村 和正	21.3.31	
	消化器内科	講師	前田 和弘 ^③	21.3.31	
	筑紫消化器科	講師	戸原 恵二 ^⑧	21.3.31	
昇格	産科婦人科学	教授	宮本 新吾	21.4.1	
	皮膚科学	准教授	今福 信一	21.4.1	
	病理学	准教授	中山 吉福 ^⑦	21.4.1	
	腫瘍・血液・感染症内科学	准教授	高田 徹	21.4.1	
	消化器外科	准教授	乗富 智明	21.4.1	
採用	筑紫脳神経外科	准教授	相川 博	21.4.1	
	筑紫耳鼻咽喉科	准教授	坂田 俊文 ^⑩	21.4.1	
	消化器外科学	講師	篠原 徹雄 ^⑫	21.4.1	
	精神医学	講師	松下 満彦	21.4.1	
	消化器内科学	講師	岩田 郁 ^⑬	21.4.1	
	精神神経科	講師	松下 満彦	21.4.1	
	内分泌・糖尿病内科学	教授	柳瀬 敏彦	21.4.1	
	再生・移植医学	准教授	小玉 正太 ^⑬	21.4.1	
	薬理学	准教授	山本 信太郎	21.4.1	
	総合周産期母子医療センター	講師	増本 幸二	21.4.1	
筑紫外科	講師	酒井 憲見 ^⑧	21.4.1		
任命	小児科学	てんかん分子病態研究センター研究部長	廣瀬 伸一 ^③	21.2.1	

正会員 75 周年 寄付情報 1 (第 7 回発表分まで)

No.	支部/回	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18
1	111 七隈	1,000,000		1,430,000	300,000	400,000	300,000		300,000					100,000			100,000		
2	112 筑紫病院	20,000	500,000			100,000					300,000								130,000
3	113 福岡	1,230,000	1,500,000	1,100,000	400,000	1,900,000	700,000	2,210,000	1,230,000	1,700,000	300,000	2,110,000				1,000,000		10,000	
4	114 赤十字																		
5	115 北九州		1,500,000	400,000	500,000	950,000	900,000		380,000	500,000	600,000	300,000	100,000	300,000		300,000	300,000	130,000	
6	116 飯塚				100,000						300,000								
7	117 筑豊			2,000,000											100,000				
8	118 筑紫	300,000			300,000	300,000		300,000	300,000				300,000						400,000
9	119 朝倉	300,000					300,000		300,000										
10	120 筑後	200,000	500,000		750,000	300,000		300,000	300,000				20,000	300,000	10,000		410,000		
11	130 佐賀	300,000	300,000	750,000	100,000	400,000	150,000	20,000	100,000			50,000	200,000		100,000				
12	141 長崎	200,000	100,000	50,000			300,000	100,000	200,000	10,000		10,000		100,000					
13	142 佐世保			100,000	200,000		100,000	100,000	400,000	100,000							20,000		
14	150 熊本				510,000	250,000	200,000	120,000	10,000	100,000	100,000	110,000					100,000	100,000	
15	160 大分	300,000		110,000			1,100,000	300,000	550,000	100,000	100,000	100,000	100,000						
16	170 宮崎	400,000	400,000	100,000		1,000,000	50,000	400,000	100,000		100,000	50,000							
17	180 鹿児島		10,000	100,000	200,000	10,000	100,000	50,000	100,000	100,000			500,000		100,000				
18	190 沖縄			100,000				300,000	100,000										
19	200 中国	100,000	300,000	200,000		300,000		10,000	30,000	480,000	300,000	100,000	30,000	210,000					
20	220 広島					100,000				100,000		110,000	100,000	300,000	150,000		100,000	100,000	10,000
21	300 四国					100,000	100,000	20,000	100,000		100,000								
22	400 関西		200,000									100,000					50,000		
23	500 中部				100,000														
24	600 関東										100,000								
25	700 東北					20,000											10,000		
26	800 北海道								10,000										
27	外国																		
28	不明																		
29	合計	4,350,000	5,310,000	7,040,000	3,460,000	6,030,000	4,300,000	4,230,000	4,510,000	3,140,000	2,300,000	3,040,000	1,350,000	1,310,000	460,000	1,300,000	1,090,000	340,000	540,000
30	総人員 A	60	81	86	116	110	117	121	149	116	103	116	91	114	98	95	126	103	98
31	寄付人員 B	17	22	26	22	22	23	23	27	14	11	19	11	10	5	6	10	5	4
32	B/A(%)	28	27	30	19	20	20	19	18	12	11	16	12	9	5	6	8	5	4

No.	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	合計	人数C	寄付数D	D/C	支部 2	
1				300,000				60,000		40,000	10,000	80,000	20,000	4,440,000	364	25	7	111 七隈	
2											10,000		10,000	1,070,000	96	8	8	112 筑紫病院	
3									20,000	10,000		10,000	110,000	15,540,000	634	59	9	113 福岡	
4														0	20	0	0	114 赤十字	
5										100,000	100,000		40,000	7,400,000	225	37	16	115 北九州	
6												20,000		420,000	41	3	7	116 飯塚	
7														2,100,000	33	2	6	117 筑豊	
8	50,000												50,000	2,300,000	103	9	9	118 筑紫	
9														1,500,000	22	5	23	119 朝倉	
10														3,090,000	177	15	8	120 筑後	
11	40,000										100,000			2,610,000	139	25	18	130 佐賀	
12	100,000													1,170,000	109	12	11	141 長崎	
13														1,020,000	45	9	20	142 佐世保	
14					300,000									1,900,000	172	20	12	150 熊本	
15	100,000	10,000												2,870,000	78	18	23	160 大分	
16														2,620,000	76	13	17	170 宮崎	
17					100,000									1,370,000	160	14	9	180 鹿児島	
18														500,000	52	3	6	190 沖縄	
19	10,000									1,000,000				3,020,000	99	16	16	200 中国	
20						10,000								1,080,000	96	11	11	220 広島	
21			100,000						30,000					450,000	51	6	12	300 四国	
22											10,000			360,000	136	5	4	400 関西	
23														100,000	51	1	2	500 中部	
24	100,000		100,000								10,000	10,000		320,000	142	5	4	600 関東	
25														30,000	13	2	15	700 東北	
26														100,000	13	1	8	800 北海道	
27			30,000											30,000	17	1	6	外国	
28														0	11	0	0	不明	
29	400,000	10,000	230,000	320,000	410,000	0	0	60,000	50,000	1,150,000	240,000	120,000	230,000	57,320,000				合計	
30	105	109	93	95	98	90	94	102	99	95	112	97	91		3175				総人員A
31	9	1	3	2	3	0	0	4	2	5	6	8	5			325			寄付人員B
32	9	1	3	2	3	0	0	4	2	5	5	8	5						10.2 B/A(%)

正会員 75 周年 寄付情報 2 (平成 21 年 4 月 11 日現在 / 第 7 回発表分まで)

Table with columns: 支部 (Branch), 卒回 (Retiree No.), 姓名 (Name), 75 周年寄付 (75th Anniversary Donation), 支部 (Branch), 卒回 (Retiree No.), 姓名 (Name), 75 周年寄付 (75th Anniversary Donation), 支部 (Branch), 卒回 (Retiree No.), 姓名 (Name), 75 周年寄付 (75th Anniversary Donation), 支部 (Branch), 卒回 (Retiree No.), 姓名 (Name), 75 周年寄付 (75th Anniversary Donation). Rows are grouped by branch: 七隈, 福岡, 北九州, 筑豊, 筑後, 筑前, 佐賀.

お役立ち情報

Have Pen, Will Travel

Robert Glasser

English Language Medical Editor, Department of Plastic Surgery, School of Medicine, Fukuoka University

"Writing in English is the most ingenious torture ever devised ..."--or so said James Joyce who, as one of the last century's greatest novelists, certainly earned his right to an opinion on the matter. My guess is that few Japanese doctors compelled to publish in English would disagree with him. Even fewer would contradict another novelist, Edna Ferber, who characterized writing as "a combination of ditch-digging, mountain climbing, treadmill and childbirth". Still, most would probably insist that novels and medical papers have little in common. And they would be wrong. For all writing shares one over-riding imperative: the author's responsibility to make the reader turn the page; the understanding that no one **has** to read anything he writes, and no one will unless he makes it look worth the bother.

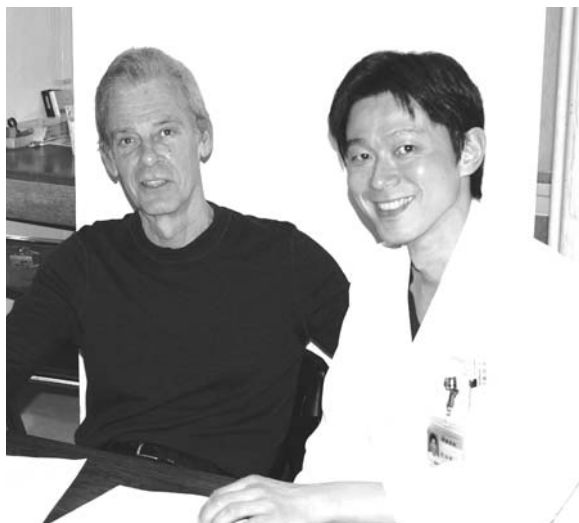
In journal articles, this responsibility begins (and sometimes ends) with the Abstract--two or three hundred words that must not only present your research clearly, but demonstrate its importance. Fail here and you fail everywhere.

Anyone looking for professional assistance with English language medical writing, editing, or proof-reading is encouraged to contact me or ask about my service at the Fukuoka University Department of Plastic and Reconstructive Surgery, with which I've worked the last ten years.

Robert Glasser

Phone and FAX: 092-716-1368

e-mail: sacnoth603@ybb.ne.jp



編 集 後 記

今回から本会報がA4判となったのを機に、内容を変更してみた。新任教授、退任教授のご挨拶に続き、従来、二つのみであった教室紹介を、今回から希望された科は全て掲載することにした。また、教室（講座）だけでなく、診療部門やセンターまで広げ、医学部・病院の活動を皆様に紹介することにした。おかげさまで今回は、医学部講座、福岡大学診療部門を含め多くの寄稿があり、それぞれ特色のある紹介文を掲載できた。次回は、基礎医学教室や筑紫病院からの寄稿をお願いしたいと考えている。若手医師に研究の楽しさと、必要性を伝えていただきたい。

学外施設からの投稿も歓迎する。卒後研修で学外へ行く卒業生が増えているが、そこで感じたことがいろいろとおありのことであろう。福大病院も魅力ある研修施設にすべく内藤病院長の号令の下、大改革の最中である。母校の発展、福岡、ひいては日本の医療の向上のため、よその釜の飯を食った人ならではの前向きなご意見を募る。

また、新たに、お役立ち情報のコーナーを作ってみた。初回は形成外科医局の English Language Medical Editor を長年お願いしている Robert Glasser 氏を紹介することにした。私は指導医として、医局員にはできるだけ早い時期から英文による論文作成に慣れてもらいたいと望んでいる。しかし、論文初心者が作成したレポートを、論理的思考や科学的表現法、論文の構成スタイルから指導し、雑誌に掲載されるレベルまで直させていくのはかなり厄介な仕事である。意味不明な英文もどきを前に絶望的な気分になったことも一度ではない。氏に英文指導を仰ぐようになってからは、おかげでストレス無く論文添削ができるようになった。Native speaker が身近にいることで、気軽に英文抄録の作成や国際会議での発表ができるようになり、医局員たちもよろこんでいる。学問的なことに限らず、こういった分野でもよいので、会員に有益と思われる情報があつたら、お役立ち情報コーナーにどしどし投稿いただきたい。

最後になったが、私の同級生で、埼玉医科大学教授に就任されたばかりであった小田島安平君（3回生）の早すぎる死を悼み、ご冥福を心よりお祈りする。

大慈 弥 裕之（広報担当理事）

事務局からのご連絡

- ◆ニセ電話にご注意を・・・医学部同窓会の事務員を装い、会員名簿を作るからお子様（研修医）の住所や勤務先を知らせて欲しいという電話が、ご実家やご自宅の方に相次いでいる模様です。同窓会としては電話でのお問い合わせは一切していません。ご注意ください。
- ◆春号、秋号ともご実家に・・・従来は会報の秋号だけをご実家の方にお送りしていましたが、今号から春号もお送りする事にしました。ご投稿もお受け致します。
- ◆会報を広く情報伝達の場に・・・医学部、病院、同窓会、会員、それぞれの人が、それぞれの情報をそれぞれの相手に蟠りなく伝えて欲しいと願っています。教室、部門紹介など、何時でも何回でも投稿下さい。広く、躍動する情報伝達のテーブルに育てましょう。
- ◆事務局員ご紹介



S I O

お詫び：本名をニセ電話に利用されな
いためにイニシャルでお許し
下さい。

卒 業 記 念 植 樹



平成22年度 福岡大学医学部同窓会

研究奨励賞 募集要項

対 象：正会員及び準会員で、40才未満の者または学部卒業後10年未満の者
(本会会費完納を条件とする)

研究課題：医学に関するものであれば自由 (医学に関する研究計画又は研究論文)

申請方法：所定の申請書による (所定欄に支部長推薦を要す)

提出先：〒814-0180 福岡市城南区七隈7-45-1 福岡大学医学部同窓会事務局
Tel 092-865-6353 (直通) 代表092-801-1011 内線3032 Fax 092-865-9484

締 切：平成22年4月30日

賞状・賞金：奨励賞 (優秀論文賞を含む) 5件以内

発表及び表彰：平成22年7月、第29回同窓会総会席上

そ の 他：
① 受賞者は研究報告書を提出する事。
② 計画受賞者は1年後研究成果報告書を提出すること。
③ 申請書は同窓会事務局に請求又は烏帽子会ホームページからダウンロードの事
④ 申請書はワープロで記載し、過去の研究業績 (原著、著書、症例報告、学会発表)、研究の独創性・重要性を十分に書く事

烏帽子会会報第46号

発行日 平成21年5月15日
発行人 高木 忠博
編集人 大慈弥裕之

発行所 〒814-0180
福岡市城南区七隈7-45-1
福岡大学医学部同窓会
電話 092-865-6353 (直通)
092-801-1011 (代表)
内線 3032

FAX 092-865-9484

E-mail: eboshi@minf.med.fukuoka-u.ac.jp

印刷所 ロータリー印刷(株)
福岡市中央区長浜2-1-30
電話 092-711-7741
FAX 092-711-7901